

医者も知らない平穩死



連載⑫

△長尾和宏△長尾
クリニック院長。
日本尊厳死協会副
理事長。著書に
「『平穩死』10の
条件」など。

医者から「老衰なので口から食べるのは無理。胃ろうを作るべき」と迫られた患者さんのご家族が相談にいらつしやうした時、「胃ろうを作らない選択もありま

す。病気が進行し、筋肉の萎縮で食べ物のみ込むことが出来なくなってしまう。そんなAさんにとって、胃ろうは福祉道具。足が悪くて歩けない方にとっての車椅子と同じ位置付けです。

胃ろう栄養でまだ生きられる可能性があるのです。だから、私はAさんに胃ろうを勧めます。

（ALS）を患っている

Aさんは神経難病のひとつ、筋萎縮性側索硬化症

でも、私は「胃ろう反対派」では決してありません。

人生いろいろ、胃ろうもいろいろ



（写真はイメージ）

もありませんが、意識があり、人間の尊厳が保たれている状態なら、胃ろうを利用したくさん生きて人生を楽しんでほしいと伝えます。それでも拒否されるなら、ご本人、家族、医者の3者で話し合います。

ご高齢のBさんは食事をすると喉に詰まらせることが増えました。転倒による骨折で入院した病院で、「誤嚥性肺炎を起こすので胃ろうにすべき」と医者に言われました。でも、私は、前回も少し紹介しましたが、お話ができるようなら、口から十分食べられると考えます。もし私が主治

医なら、Bさんには胃ろうを勧めないでしょう。

Cさんは認知症の進行とともに食欲が衰え、体力もどんどん低下していきま

した。ご家族は医師の勧めで、胃ろうを作りました。すると、栄養状態が改善し、気力、体力が少しずつ戻り、再び口から食べられるようになった。口から食べられる時は口から、そうでない時は胃ろうで、と使い分けています。

鳥倉千代子さんのヒット曲「人生いろいろ」。私が皆さんに言いたいのは、「人生、いろいろ、胃ろうも、いろいろ」なのです。